

外国人留学生と日本人学生への アカデミック・スキル指導についての考察 －演習型授業におけるレジユメの分析から－

深川 美帆・深澤のぞみ・札野 寛子・濱田 美和^{註1}

要 旨

本稿は、大学の演習型授業において作成されたレジユメを分析し、外国人留学生と日本人学生のアカデミック・スキルにおける問題点を明らかにすることで、これらのスキルの習得に必要な教育の在り方を考えようとするものである。日本国内の大学で学ぶ人文・社会学系専攻の日本人学生と外国人留学生が、自身の研究についての発表を行う演習型の授業で作成したレジユメをもとに、そこに現れた誤用や不自然な使用を分析した。その結果、留学生、日本人学生のいずれにも見られる問題点と、特に非母語話者である留学生に特有の問題があることがわかった。これらの結果から、留学生か日本人学生であるかにかかわらず必要なアカデミック・スキル育成に向けてどのような支援・教育が必要かを提案する。

【キーワード】 アカデミック・スキル、レジユメ、外国人留学生、日本人学生、日本語教育

I. 背 景

1. 日本の大学におけるアカデミック・スキル育成の方向性

現在、日本の大学を取り巻く状況には大きな変化が起こっている。まずは、教育におけるグローバル化が進みつつあり、日本語を母語としない学生、すなわち外国人留学生（以下、留学生）の受け入れがこの20年近くで大幅に伸びてきている^{註2}。これまでの留学生に対する教育では、大多数の日本人学生の中に少数の留学生が交ざり、留学生には日本の大学という環境で日本人を主体とした教育に適応し、溶け込むことが期待されてきた。しかしながら、今後は、教育の場においても多様化が進み、留学生と日本人学生が共に学ぶ中で、日本人学生も刺激を受けて学んでいくことが大学の国

際化やグローバル人材育成という面から期待されている。そうした教育現場の状況の変化から考えると、従来のように留学生を「取りだし」て日本の大学に適応できるように、特別に教育を行うという発想から、留学生も日本人学生も共に同じ場で学ぶ方向への転換点に差し掛かっているといえよう。

また一方で、日本の大学では、大学教育のマス化により、学習、研究のために必要なアカデミック・スキル (academic skills) の育成が、従来のように専門分野の教育において経験的に学んでいく方法から、初年次教育などにおいて体系的に行う方法への転換を余儀なくされるようになってきている。さらに、社会、経済界からの要請を受け、大学の学問領域の区別なく身につけさせるべき能力、ジェネリック・スキル (generic skills, 汎用的技能) (河合塾2011) にあるような、「コミュニケーション・スキル」「数量的スキル」「情報リテラシー」「論理的思考力」「問題解決力」といった力の育成への関心も高まっている。大学の教育現場においては、こうしたいわゆる「新しい能力」¹³について、大学における教育の在り方として様々な議論はあるものの、21世紀を生き抜く人材をいかにして育てるかという観点においては、大学が取り組むべき課題の一つとなっている。

2. 日本語教育におけるアカデミック・スキル育成の現状

日本語教育の分野では、日本の大学への留学生の受け入れが増えてきた1990年代から「アカデミック・ジャパニーズ」という一領域が生まれ、その構成要素に関する研究や、教材開発が進められてきた。しかしながら、研究や教育実践に関しても、留学生が困難を覚えやすいアカデミック・ジャンルの語彙や表現の問題点を研究対象としたものが多い。そのような中、高等教育機関における「学び」という点から日本語教育について扱った教材では、大島他 (2009) などその動きは見られるものの、管見の限りまだ多くはない。「アカデミック・ジャパニーズ」のこれまでの知見をもとに、今後の大学教育における留学生への日本語教育においては、日本人学生の母語としての日本語リテラシー教育との接点も考慮に入れつつ、教育を実践していく必要があると考える。

II. 本研究の目的

これまでも大学の初年次教育において、論文やレポートの書き方についての研究や教育は多くなされてきたが、いわゆる「レポートとは」「論文とは」といった概説的な解説で終わることが多く、実際にどのようにそれらを作成し、どのようにして完成に

至るかといったプロセスについての指導・教育について分析した研究や教育実践は多くはない。そこで筆者らは、演習形の授業で用いられるレジユメに注目した。レジユメ作成とそれを用いて行われる口頭発表という学習活動には、研究テーマの着想、設定から、研究の構成、具体的な研究デザイン立案、研究・調査の実施、さらにはその内容をまとめて文字化し、研究内容を発表する、というように、規模が小さいながらも研究を組み立てる上で必須の学習活動が全て要求される。こうした点から、筆者らは大学における学習活動に必要とされるアカデミック・スキルの主要な要素を分析する素材として適していると考えた。ただし、レジユメは、アカデミックなジャンルでの文章媒体であるという点ではレポートや論文と共通しているが、形式や文のまとめ方にはそれぞれ異なる独自の特徴があるため、それらについての知識やスキルがなければ学習活動において求められる要件を満たすレジユメの作成は難しい。日本語教育においては、これまでもレジユメを題材とした教育実践がなされているが³(鎌田2005, 2008; 茂住2005, 2009; 平山2013)、日本人学生と同一課題のもとでの比較はなされていない。そこで本研究では、レジユメ特有の問題点を、留学生と日本人学生の比較を通して探り、アカデミック・スキル育成において、どのような教育・支援が必要かを明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. レジユメの定義

レジユメは専門分野によって扱いや形式が異なる面も多いが、ここでは、できるだけ一般的なレジユメの特徴を定義するため、既刊の大学生向けのアカデミック・スキルに関する教材・参考書でレジユメについての説明や記述を調べた。それらをもとに⁴本稿では、「レジユメとは、「『要約』『摘要』とも呼ばれ、大学の演習形式の授業などで発表する際に用いられる、口頭発表を補完する文字による説明資料である」と定義する。レジユメの形式は、内容を大きな項目に分けてその項目の要約を文章で書いた「記述型レジユメ」と内容を簡条書きにした「アウトライン型レジユメ」の2つのタイプに分けられる。本研究ではいずれの型も分析対象とする。

2. 分析対象の資料

対象とするのは、2012年から2013年にかけて、日本国内の大学で人文・社会科学系分野を専攻とする日本人母語話者と上級日本語学習者が作成したレジユメ81本で、日本語母語話者のものが66本、留学生（日本語能力試験 N2レベル以上の日本語学習者）

のものが15本である。内容は自分自身の日本語や日本文化に関する卒業論文のテーマを絞り込むことを目的に、関連の先行研究をまとめたものが多い。そのためか、いわゆるアウトラインのみを簡潔に示すレジュメより、内容を要約しまとめる記述型のレジュメが多かった。また、授業の性質上、1人の学習者が学期中に2回以上発表しており、書き手が同じものも含まれるが、作成するレジュメの内容は毎回異なっている。なお、レジュメを作成した日本人学生は、大学1年次に初學者教育としてレジュメの書き方の基本的指導を受けた経験があるものの、実際に自分の発表のために書いた経験はほとんどない。留学生は、これ以前に日本語のレジュメの書き方についての授業を受けたことがない学生たちである。

これらのレジュメにおける問題点を量的・質的に分析し、レジュメ作成における困難点がどこにあるかを調べた。

3. 分析の観点

分析にあたり、レジュメに求められる条件を、上述のアカデミック・スキルに関する教材における記述をもとに以下のように設定した。

- ①レジュメを用いて行われる発表の論理構成が整理して示されていること。
- ②客観的事実に基づき、論理的に説明や考察がなされていること。
- ③引用が適切に行われていること。また、その出典が明確に示されていること。
- ④情報が過不足なく要点を絞って簡潔に、かつ視覚的にもわかりやすく示されていること。
- ⑤全体の分量が発表時間や内容に合った適切な分量であること。
- ⑥的確な語彙・表現が用いられていること。

これらのうち①②③⑥は、レジュメに限らず、レポートや論文にも共通するものである。レジュメの特徴としては口頭発表を補完する視覚資料という役割から、④や⑤といった条件も求められる。これらの6つの点において、対象とするレジュメを分析、分類し、問題となる箇所の特徴を記述した。分析は、日本語教育と専門教育の両方を教えている教師3名で分類し、分類が一致しないものについては話し合いの上、再度分類した。

IV. 結果と考察

1. 全体的傾向

レジユメの問題となる点を分析、分類した結果、留学生、日本人学生共に最も問題点に占める割合が大きかったのは「日本語」に関するものであった。留学生については、日本語に関する問題が全体の約8割を占め、次に多かったのが引用に関する問題であり、この2点が問題のほとんどを占めていた。これに対し、日本人学生は、日本語に関する問題は約5割で、残りは、内容、構成、その他に関する問題が引用と同じ程度の割合を占めていた。その他に分類されたのは、図表の形式の不適切さ、記号の不統一な使用、参考文献の不適切な提示または情報不足などである。

表1 レジユメに見られた問題点の数

	日本人学生	留学生	全体
日本語	71	87	158
内容	27	3	30
引用	19	10	29
構成	12	2	14
分量	5	2	7
その他	23	4	27
合計	157	108	265

以下、各観点から見えてきた問題点について質的に分析、考察した結果について述べる。

2. 「テーマ設定」「構成」「内容」に関する問題

研究テーマを設定し、構成を組み立てることは、アカデミックな場において何よりも肝心な部分である。また、学術的分野に限らず、「ジェネリック・スキル」において求められる「問題発見、解決能力」にも通じるものである。この観点において、留学生、日本人学生の両方に次のような問題点が見られた。まずは、不十分なテーマ設定である。アカデミック分野における研究テーマとして不適切なものや、このままでは研究として成立が難しいと思われるものをテーマとして選んでいるもの（例「金沢の和菓子文化」(日本人)）や、テーマの範囲が広すぎてどの部分を研究としてとらえていくかが見えにくいもの（例「日本のアニメと漫画」(留学生)、「日本語の変化」(日本人)）などが見られた。

次に、設定した研究テーマについての適切な情報収集ができていない問題が見られた。例えば、先行研究としてはあまりに古いと考えられるものや、そのテーマに関してより一般的で学術的価値を持つ先行研究にまで当たれていないものや、インターネット上の信頼性の低いサイトをもとにしているものや、種類、年代、引用元に偏りがあるようなものが見られた。

また、レジюме内での論理構成に問題があるものも多く見られた。具体的には、発表の目的が示されていないものや、発表の目的に対して章立ての関連性が不明確で、論旨がどこに向かっていくか不明確なものも見られた。

これらの問題については、留学生と日本人学生双方に同様に見られた。こうしたことは、アカデミック場面で何が求められているか、どのように研究を組み立てていけばよいのかという知識や経験が欠如しているために起こるものと考えられる。

3. 「引用」に関する問題

「引用」に関する問題も、留学生、日本人学生双方に見られた。もっとも顕著であったのは、妥当な分量以上に引用が記されている例である。中には直接引用がレジюмеの大半を占めるものもあった。今回レジюмеが作成された演習形式の授業は、学生が自分自身の卒業研究のテーマの先行研究についてまとめて発表するものが多かったということもあり、引用する文献に載っている文章のかかなりの分量を単に抜き書きし、つなぎ合わせてレジюмеが構成されている例も少なくなかった。特に、留学生のレジюмеにおいては、全分量の大半が引用の文章からなる例もあった。また、引用部分と発表者自身の考えとが明確に区別されていない例や、引用箇所の適切な提示がない例が見られた。

これらのことについては、論文やレポートにおいてもこれまでに指摘されているが、簡潔にわかりやすく情報を提示する必要があるレジюмеという媒体においても同様の問題があることが確認された。このことは、適切な引用がどうあるべきかについて、学生の理解不足と、具体的にどのように引用して書いたらよいか、その方法がわからないためではないかと考えられる。

4. アカデミックな場面での日本語の表現に関する問題

留学生のレジюмеでは、当然予想されることであるが、いわゆる文法や語彙の誤用の他に、日本人学生も含めて特に以下のような問題が顕著であった。

(1) 話し言葉と書き言葉の混在

話し言葉で使われる表現をアカデミック場面でも使用している例である。例1では

「こんな」は「このような」、例2では「から」よりも「ため」が、例3では「だから」よりも「したがって」などの語彙がアカデミック場面では用いられることが一般的であるが、留学生の場合は、話し言葉の表現をそのまま文字化してレジユメに書く例が顕著であった。

例1 こんな強い影響力を持つテレビ放送は現在なぜ日本のアニメ視聴の主要なメディアとなっていないのか (留学生) ^{注5}

例2 しかし私たち外国人にとって日本語の環境が少ないから擬音語・擬態語に対する理解力や応用力は弱いと考えている。(留学生)

例3 周りのクラスメートにも「母語の干渉を受ける」ということがよく言われている。だから、母語と対象しながら、勉強するのが、中国の大学における日本語教育に大切だと思われる。(留学生)

しかしながら、留学生が書き言葉と話し言葉についての区別を全く意識していないかという点を決してそうではなく、アカデミック場面を意識した語彙表現を使おうとするも、文法的に間違っている例も見られた。

例4 しかもできるだけ、「日本文化」だけじゃなく、現代中国文化との比較も考えながらやりたいである。(留学生)

例5 日本のポップカルチャーの国際化、グローバル化はすでに果たされたといえよう。ゆえに、日本のポップカルチャーを研究するため、マンガ、アニメなども研究する予定である。(留学生)

このように、留学生にはまず、話し言葉と書き言葉の使用場面の明確な違いを理解していないことによる誤りが多いことと、論文や発表のようなアカデミック場面にふさわしい語彙についての知識はあるが、それを正確に運用できないという問題があることがわかる。

(2) アカデミック場面に適した語彙・表現の選択

日本人学生のレジユメにも、例1, 2, 3のように明らかな話し言葉という例が少ないものの、アカデミックな場面には使われない話し言葉に近い表現(例6, 7)や、文体がアカデミックな場面で使用される「である体」のほうが適切である例(例8, 9)が見られた。

例6 着々と使用する人は増えて行っているのでだんだん定着していくのではないか。(日本人)

例7 意味の違いに気づくことができるか微妙である。(日本人)

例8 これは、日本語と英語の音節構造の違いによって生じる現象だ。(日本人)

例9 なぜなら、テレビ番組やお笑い芸人などは(中略)以前は関西方言ばかりが

取り扱われていたからだ。(日本人)

また、日本人学生の文章の中には、アカデミックな場面で使われる語彙表現を使って一見それらしく見えるものの、よく読んでいくと不適切な使用であるものもあった。

例10 以下は米川の見解をまとめたものとする。(日本人)

例10は前後の文脈から考えて「ものとする」ではなく「ものである」が適切な表現であるが、これを不用意に多用される例が複数の日本人に見られた。

(3) 客観性、確信度を低める表現の選択

アカデミックな場面、特に自らの研究について説明をする文章においては、客観性、論理性を持った文章記述が求められる。しかしながら、以下のように、書き手の感想や主観を述べる表現を選択し、結果的に客観性、信頼性を低めてしまう例が留学生、日本人学生の両方に見られた。

例11 灰谷 (2003) の研究から、若者は新しいものをどんどん使おうとするのだと感じた。(日本人)

例12 金 (2012) や渡邊 (2012) では、コーパスによる用例分析が主な調査方法だったかと思う。(日本人)

例13 テキストの内容は、なんだか、日本語を教えるだけでいいというような感じがする。(留学生)

アカデミックな文章においても書き手の主観を表すことはあるが、この例のように、場合によっては客観性、確信度が低い印象を与える。

その他の問題点としては、文章のねじれが日本人学生、留学生双方のレジюмеにおいて見られたが、日本人学生のレジюмеの方に多く見られた。これは、留学生のレジюмеには直接引用の部分が多く、自分自身で実際に書いた部分が少ないため、それほど目立たなかったものと思われる。このような文章レベルでの正確さについても問題が見られた。

以上のような日本語の問題は、アカデミックな場面における適切な言語運用という点での知識や訓練が不足していることに由来すると考えられる。これは、母語話者、非母語話者の別というよりも、こうした知識やスキルが不足している学生が抱える共通する問題であるといえる。

以上のことをまとめると、レジюме作成における問題点で、日本人学生、留学生に共通して見られたのは、1) 研究テーマの設定、2) 論理構成、3) 引用の仕方、そして4) アカデミックな場面での日本語表現の使用である。これらは程度の差はあるものの、日本人学生・留学生のいずれにとっても困難点であり、指導が必要である。また、留学生には、これらに加え、アカデミックな場面での言語使用の前提となる日本語の

基礎的知識と運用力の指導が必要であることがわかった。

V. まとめと今後の課題

本稿では、レジユメに現れた問題点を分析することで、アカデミック場面に必要な言語能力とスキルとは何かを考察した。その結果、留学生であっても日本人学生であっても同様に問題となる点と、特に非母語話者である留学生に特有の問題があることがわかった。今後日本の大学では、留学生だけを取りだした形ではなく、日本人学生と留学生が共に学ぶ場面が大学においてより増えると予想される。本稿の結果から、日本人と留学生の双方が共に、あるいは独自に抱える問題点を洗い出し、アカデミック・スキル育成に向けてどのような支援・教育が必要かを提案することができる。

レジユメ作成には、テーマ設定とアウトライン作り（論理構成）、わかりやすい文章・まとめ方（引用、要約）、アカデミック場面で用いる語彙・表現などのスキルが求められるが、それらがレジユメではレポート、論文に比べ書く分量も多くなく、それでいて、研究の構成や内容の全体を見渡することができる。その特徴を生かし、効率的にアカデミック場面に必要なスキルと言語使用の指導を行うための媒体として利用できるのではないか。

今後の課題としては、本稿で明らかになった点をどのように教育の実践に組み込んでいくかを検討することが挙げられる。これまでも、レポートや論文の書き方についての教材やアカデミック・スキルについての解説書などは多く作られており、通常は大学1年次にそのための教材を用いての教育も行われている。しかしながら、今回の日本人学生らの例でも明らかのように、初年次教育で一通りの指導を受けてはいても、それだけで適切なレジユメの作成ができる能力が習得できるわけではない。こうしたスキルの育成については、ただ説明的知識のみ伝授しても身につくものではなく、効率よく経験を通して学習し体得していくプロセスが必要であると思われる。今回分析対象としたレジユメは、1人の学生が1学期間に複数作成しており、個々の学生のレジユメを時系列に見ていくと、次第に適切な形式、内容に変化している例も見られた。これは、演習形式の授業を通して、初回の発表時はアカデミック場面での言語使用や構成を理解しておらず問題があったものが、自分自身で実際に作成して、教師や他の学生から指摘を受けたり、他の学生が作成したレジユメの例を見る機会に接触したりして次第に学習していったのではないかと推察される。こうしたことから、アカデミック場面での言語使用やスキルについての指導においては、「よきモデル」や具体例が学習者に理解可能な形で提示されることが重要である。具体的には、レジユメをアカデ

ミック・スキル育成の媒体として活用し、初年次からアクティブ・ラーニングの手法により効果的に教育し、専門教育への橋渡しを目指す方法も可能であろう。

今後は、本研究での考察をふまえ、アカデミック場面で必要なスキルと日本語の言語表現のより効果的な指導方法について検討を重ね、実用的な教材開発に取り組みたい。

【注】

- 1 深川美帆(金沢大学国際機構留学生センター)・深澤のぞみ(金沢大学歴史言語文化学系)・札野寛子(金沢工業大学)・濱田美和(富山大学)
- 2 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)(2013)による。
- 3 松下(2010)では、「キー・コンピテンシー」「生きる力」「人間力」「学力」「社会人基礎力」等の多様な用語で表される、従来の「学力」の範疇には収まりきれない能力のことを「新しい能力」と呼び、そのスタンスについては、①<新しい能力>概念を率先して移入して具体化しようとするもの、②<新しい能力>概念をラディカルに悲観し、無意味なものとして放擲しようとするもの、③<新しい能力>概念を批判的に検討した上でそこに含まれる多様な概念を分析あるいは再構築しようとするもの、の3つを挙げている。
- 4 レジュメの定義については、ノートルダム清心女子大学人間生活学科編(2012)、北尾謙治〔他〕(2005)、佐藤望〔他〕(2012)の記述をもとにした。
- 5 下線は筆者による。以下同様。なお、個人の特定につながるような例については適宜、語句を改変した。

【付記】

本稿は第16回専門日本語教育学会研究討論会(2014年3月1日)「演習発表型授業でのレジュメにおける問題点の考察ー留学生と日本人学生のアカデミック・スキルに注目してー」(深川美帆・深澤のぞみ)での発表内容を大幅に加筆修正したものである。また、本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「アカデミックCan-Doグリッドに基づく日本語教材モデルの設計」(課題番号25370586 研究代表者:深川美帆)の助成を受けて行われた。

【参考文献】

1. 大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子(2012)『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーションープレゼンテーションとライティング 第2版』ひつじ書房。
2. 鎌田美千子(2005)「学部留学生の発表活動に必要な日本語文章表現指導:レジュメ・提示資料に見られる問題点とその指導」『外国文学』54, pp.53-66, 宇都宮大学外国文学研究会。
3. 鎌田美千子(2008)「プレゼンテーション文書作成に見られる留学生の日本語パラフレーズー原文からの引用における箇条書きに着目して」、『外国文学』57, pp.31-46, 宇都宮大学外国文学研究会。
4. 河合塾(2011)「ジェネリック・スキルをどのようにして測定・評価するか」『Kawaijuku Guideline』11月号, pp.56-57
5. 北尾謙治〔他〕(2005)『広げる知の世界ー大学でのまなびのレッスン』ひつじ書房。
6. 佐藤望〔他〕(2012)『アカデミック・スキルズ-大学生のための知的技法入門 第2版,』慶應義塾大学

出版会

7. 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）（2013）「平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果」, 独立行政法人日本学生支援機構
8. 平山允子（2013）「大学院進学課程での『レジユメ作成と発表・質疑応答』『小論文の執筆』を目標とした授業」『日本語教育方法研究会誌』20(1), pp.100-101, 日本語教育方法研究会.
9. ノートルダム清心女子大学人間生活学科編（2012）『大学生のための研究ハンドブック－よくわかるレポート・論文の書き方』, 大学教育出版.
10. 松下佳代編著（2010）『<新しい能力>は教育を変えるか－学力・リテラシー・コンピテンシー－』ミネルヴァ書房
11. 茂住和世（2005）「学部留学生に対するレジユメの作成指導」日本語教育方法研究会誌12(1), pp.2-3, 日本語教育方法研究会
12. 茂住和世（2009）「口頭発表用レジユメを作成する」大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂編『日本語表現能力を育む授業のアイデア』第3章4節, ひつじ書房.

Academic Skills for International and Japanese Students: From an analysis of seminar resumes

Miho Fukagawa, Nozomi Fukasawa, Hiroko Fudano and Miwa Hamada

Abstract

This paper reports on the academic skills of both Japanese and international students who study at universities in Japan. It aims to clarify the difficulties of academic skills through an analysis of resumes and to consider methods of education and support for the acquisition of these skills. First, resumes prepared for seminar presentations by undergraduate students with majors in the School of Humanities were analyzed. The results revealed that 1) setting research theme, 2) the logical composition of research, 3) citation methods, and 4) Japanese language usage in academic settings are common problems and difficulties for both Japanese and international students. However, the nature of the problems was different for 3) and 4). The results also suggest the possibility of providing effective instruction in academic skills by using resumes.

[Keywords] Academic Skills, Resume, Japanese Students, International Students, Japanese Language Teaching